

科技高 いきもの記

Vol.18 2021.1.4

佐藤龍平

奇妙な家をつくるミノムシ マダラマルハヒロズコガ



↑“ツツミノムシ”とも呼ばれるマダラマルハヒロズコガの幼虫。木くずや土を利用して自分の家をつくる。



↑薄い2枚のシートがあわさり、くびれの部分だけくっつけられている。



↑顔をのぞかせる幼虫。中は結構自由に動き回れるみたいだ。



↑ミノは層状になっているのが分かる。成長に合わせて大きくしていったのだろうか。

12月23日、3年生の生物の授業で校庭を散策した。テーマは「“冬ならではの”を見つける」だ。以前にも校庭で生き物探しをしてもらった時、生徒たちは次々と面白いものを見つけてきた。そして、不思議なものを見つけては、感動したり、なんでだろう...とそれぞれが問いを立てて思いを巡らせている。こちらが何か用意するよりも自由にやってもらった方が良かったと最近を考えている（無責任かな？）。今回はなんと、前から見てみたいと思っていたマダラマルハヒロズコガの幼虫を見つけてきてくれた。しかも、「その辺にいっぱいいますよ」と言われてしまった。やはり生徒の観察眼には勝てない。

さて、この蛾の幼虫は見ての通り、とても奇妙な形の“ミノ”を作る。“ミノ”というと木などにぶらさがっている“ミノムシ”が有名だが、あれも「ミノガ」というミノガ科の蛾が作ったものだ。ただ、このマダラマルハヒロズコガ（ヒロズコガ科）は、ひょうたんのような形の薄っぺらいシートを2枚あわせて二枚貝のようにして、その隙間に入り込むというなんとも不思議な家を作っている。形が鼓（つづみ：両面に革を貼った小型の太鼓）に似ているので「ツツミノムシ」という別名もある。

クサアリなどの巣の近くからよく見つかるそうで、アリと共生しているのではと考えられていたこともあるようだが、どうもこの蛾の幼虫は肉食性で、アリのエサのおこぼれにあずかろうとしているだけらしい。共生ではなさそうだが、まだ生態がよくわかっていないのだそうだ。ミノをよく見てみると、色が分かれていて切り株の年輪のように層状になっていることが分かる。これは成長過程でミノを大きくしていったからだろう。小さい頃は身近にあった白っぽい

材料を使ってミノを作り、大きくなった時は黒っぽい材料を使ったのだと思うが、実際はどうなんだろう。飼育してミノの作り方を調べてみたら分かるかもしれない。

ところで、「蛾の幼虫」と言われたらどんな姿を想像するだろうか。蛾はチョウの仲間（鱗翅目）なので、ふつう、イモムシを思い浮かべるのではないだろうか（カイコやシャクトリムシが代表例）。だけど、このマダラマルハヒロズコガの幼虫は全然イモムシっぽくない。テカテカして硬そうだし、なんか平べったい。ミノもヘンテコだけど、幼虫もヘンテコだ。身近なイモムシも奥が深いなあ。

